

種苗事業の経営改善の成果と今後の課題

高山営林署 新田 善勝

1. はじめに

種苗事業にたずさわる者に課せられた使命は、労働安全衛生の確保、健全苗木の生産を前提とした作業能率の向上及びコストの低減である。

丹生川種苗事業所では、経営改善3か年見通しに基づき、無災害時間の継続、健康管理の充実及び昭和56年度の労働生産性 250 本/人日を目標に職場一致して意欲的に取り組み、着実な成果を得たので発表する。

2. 経営改善3か年の成果

(1) 無災害の継続

私達の職場では、「職場の和から無災害の継続」を合言葉に、作業指示の徹底、TBM、安全懇談会の充実及び安全意識の高揚に努めた。

昭和30年度以降今日まで無災害継続 113 万時間を達成することができ、さらに無災害継続に職場一致して挑戦する覚悟である。

(2) 健康管理の充実

昭和54年度の私傷病日数は、高血圧症による長欠者などがあり、延べ70人と以外な結果となり、昭和55年度以降は、「私傷病率（私傷病日数/雇用量）1%以下」を目標に、1日2回の体操、鉄棒のぶら下がり、梯子の踏み歩き及び早期発見早期治療に努め、表-1の「年度別私傷病日数」に示すとおり、昭和54年度私傷病率 3.2%から昭和55年度以降、私傷病率 1%以下となり、所期の目標を達成することができた。

(3) 労働生産の向上

育苗作業仕組の改善及び労務の適正化により、労働生産性の向上ができた。

ア 育苗作業仕組の改善

イ 除草剤の効果的な使用

昭和55年度以前は、シマジン、ニップ乳剤の混合方式であったが、昭和56年度からは、ニップ乳剤の入手ができなくなり、局造林課で紹介のあった、1969年の静岡県林業試験場研究報告第1号の「床替床における薬剤の適正施用量MO(1,000 ml)+CAT(100g)散布間隔 30~40日、散布回数 3回程度がよい」を参考として、表-2に示す「昭和56年

度除草剤散布方法」を決定し、実施したところ、肉眼観察による薬害はなく、表-3「除草功程及び経費比較」に示すとおり、功程で15%、経費で12%の節減ができた。

表-1 年度別私傷病日数

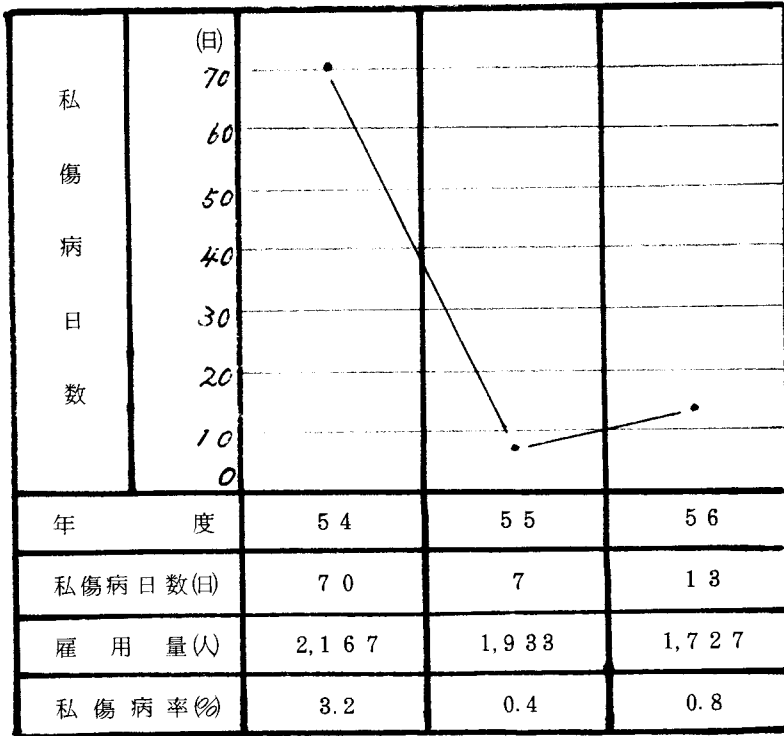


表-2 昭和56年度除草剤散布方法

区分回数	薬剤名	数量(1,000 m ² 当)	備考
1回目	シマジン M O 乳剤	100 g 500 ~ 1,000 CC	1回目の散布 床替後10 ~ 15日 散布間隔 30 ~ 40日程度
2回目	シマジン M O 乳剤	100 g 1,000 ~ 1,500 CC	
3・4回目	シマジン トリファンサイド乳剤	100 g 300 CC	

表-3 除草功程及び経費比較

100 ㎡当

年度	計		人 力		除 草 剤 散 布	
	功 程 (人)	単 価 (円)	功 程 (人)	単 価 (円)	功 程 (人)	単 価 (円)
昭 55	1.28	7,757	1.23	6,897	0.05	860
昭 56	1.11	6,933	1.06	6,322	0.05	611
比 較 55/56	1.15	1.12	1.16	1.09	1.00	1.41

(イ) 床替機による1回床替据置方式の推進

人力による1回床替据置方式は、昭和47年度から実行しているが、更らに床替機による床替が55年度から導入され、55年度は、作業方法の検討と機械操作の習熟を重点に、56年度は均一な床面作り、畦立ての改善および床替機の改良に取り組んだ。

- a アタックプレートを床面に接するように根付作業者がセットするには椅子の床面が障害となったため、8cm程度縮めた。
- b 根付箇所の前にナイフが着装されており、ブレードの前に障害物がたまる。
- c 床替後床面が乾燥すると日割れを起こし、苗木枯損の原因となる。

これらのことを改善して作業するよう実行した結果は、表-4「機械床替の実行結果」に示すとおり、功程で29%の向上ができた。なお人力床替に比較し2倍程度の能率向上ができた。

表-4 機械床替の実行結果

	実 行 本 数	1日当り本数	功 程
昭55	146.4 千本	12.198 本	3,050 本/人日
〃56	222.4	14.827	3,936
56/55比較	1.52	1.22	1.29

イ 労務の適正化

無駄のない労務の見直し、積極的な他事業への流動化を推進し、年々、労働生産性が向上できた。

昭和53年度からの労働生産性の推移は表一5に示すとおり、56年度は、53年度に比較し、41%の向上であり、56年度の目標、労働生産性 250本/人日を達成できる見込である。

表一5 労働生産性の推移

区分 \ 年度	昭53	昭54	昭55	昭56(見込)
処分数量(千本)	615.8	672.5	611.6	689.5
総雇用量(人)	3,253	3,086	2,732	2,583
労働生産性(本/人日)	189	218	224	267
生産性向上率(%)	100	115	119	141

3. 今後の課題

(1) 除草剤のより効果的な使用

昭和56年度の除草剤散布は、一応の成果を得たものの、当苗畑の土壌とマッチした除草方法であると断定することは、困難であり、今後の試験研究によって究明したい。

(2) 1回床替据置方式の定着

床替機の改善及び土壌管理、育苗管理の充実をはかりながら、さらに推進する。

(3) ヒノキポット苗の育苗の検討

ポット苗の生産意義の薄れ、生産原価が高いことから、全面的に廃止の方向で検討する。

(4) 越冬仮植の改善

越冬仮植作業は、降雨時の作業が困難であり、降雨時期が不確定である等の気象条件により適期完了が不安定である。

また、冬期間の気象の害などにより、予期しない被害がある場合は、春の出出しに影響をす

る。

これらの悪条件を克服するため、経済的かつ化学的貯蔵方法を検討したい。

なお、貯蔵方法によっては、春の労務ピークカットもできる。

4. ま と め

(1) 労働安全衛生の充実は、事業実行上欠くことができないものである。

(2) 床替機による1回床替据置方式への全面的な切替、定着、除草剤散布のより効果的な使用、越冬仮植の改善など、作業仕組、作業方法の改善を積極的に推進し、労働生産性の向上、さら

に生産コストの低減に努めてまいりたい。